

Title	エリザバス・アイゼンシュタイン著 最初の職業的革命家, フィリッポ・ミケル・ブオナロッティ (1761-1837) : 伝記的評論
Sub Title	The first professional revolutionist : Filippo Michele Buonarotti 1761-1837 : a biographical essay, by E. L. Eisenstein
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.6 (1961. 6) ,p.501(65)- 505(69)
JaLC DOI	10.14991/001.19610601-0065
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610601-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るのではなからうか。それは農業経済の資本主義化によって生れ長じながら、しかも資本主義の高度化に対する農業経済の自衛策でもあるであろう。

かく考えてくると、共済が資本主義を社会化する積極的な作用を成すとは考えられない。またいまの共済が、資本主義が社会主義化する事によって社会化されたものになるとも考えられない。しかし資本主義のより一層の前進につれて、共済が資本主義化するとともにまた考えられないところである。共済は一面においては資本主義的な要素を多分に吸収しながら、他面においては絶えず資本主義的な傾向、要素に対抗せんとしていくであろう。もし資本主義が社会主義に転ずる時があったとしたならば、このような共済はやはり解消せられて、新時代の新原則による制度がこれに代って誕生するであろう。共済は資本主義化も社会主義化もしない。共済は当面は農業経済における一種独特なる制度として在り続けるのではなからうか。資本主義の原理や技術を採り入れながら、しかも資本主義の高度化の当然の結果としての大資本、独占資本——農業よりも絶えず一歩先きを歩み続ける農業以外の、またはそれらが農業と関連をもった場合にまた農業にも発生してくる大資本——の形成とその農業——中小規模の生産資本体である農家経済に対する圧迫への自衛体としては、社会経済のより一層の資本主義の高度化に、階級として対抗する組織として、一応の発展をみながらも、結局は一定の限界を課せられて存続すると考えられる。これが共済に対する筆者

の見解であり、本書の共済論に対する筆者の主張である。

農協共済事業の現状と問題点に関する本書の記述は見るべきところが多い。そこでは下層農家の利用が弱いことが指摘せられて、農協の体質改善が論じられている。このあたりは、まさに実学の面目十分である。さらに農協共済における資金還元の問題の重要性も適確に示されている。また企業保険すなわち民保との関係も触れられている。これらの諸点は共済をめぐる大問題点であって、さらにより詳細な研究が、本書に続いてなされることを期待する。

本書の実務篇は、組合関係者にとっては有益なる部分である。しかしあまりに割然と理論篇と実務篇が分けられてしまっていて、この両者が別個の態にみられることは、本書の欠点とされるであろう。末尾の農協共済用語解説は便利である。これをようするに本書は、その理論篇では、共済に関する、その本質、歴史、使命、特質や問題点等に関して大胆なる主張をなし、その実務篇では綿密なる事務問題、手続きが明示されていて、読者は本書を基礎に、一段とより高い共済の研究に努むべきところのものである。(目次三頁、本文二八三頁、付二八四—三一八頁、一九六〇年九月一〇日第一刷発行、全国農業協同組合中央会、二五〇円)

エリザベス・アイゼンシュタイン著

『最初の職業的革命家、フィリップ・

ミケル・ブオナロッチェ

(一七六一—一八三七)——伝記的評論——』

(Elizabeth L. Eisenstein: The First Professional Revolutionist: Filippo Michele Buonarrotti 1761~1837, A Biographical Essay, 1959, pp. 205.)

野地洋行

最近アメリカから、ヨーロッパ大陸の労働運動史、あるいは社会思想史に関する研究がかなり数多く出るようになったが、このブオナロッチェに関する研究も、ハーヴァード歴史研究叢書の一冊であり、力の入った研究書としてわれわれの興味をひく。

なおついでながらソヴィエトからも近頃、サン・シモンや、チャイティズムに関する研究や、フランス社会主義思想史に関する研究が現われることを考えると、大陸の労働運動史、社会思想史研究の場は、むしろ旧ヨーロッパからソヴィエトおよびアメリカへと拡がりつつあるように思われる。しかもこれらの研究において目につくことは、それらの研究の上にも現代の世界の現代的対立が多少なりとも反映せざるをえない、という事実である。たとえば、それは社会主義の祖であるサン・シモンを同時に全体主義の祖として規定す

るような場合にもっともはっきりと現われる。(Georg G. Iggers:

The Cult of Authority, 1958)

その点からいえば本書の著者は研究者自身がうける歴史的規定からできるだけ自由であるよう努力しているのが買える。また、著者が、ブオナロッチェ研究をそれ自体の盛衰や評価の変転を時代的背景の中でみていることは、著者の十分な歴史感覚を証明するものである。

本書の根本的な性格は、資料的探究によって、ブオナロッチェ研究に何か独創的な、新しい要因をつけ加えるということではなく、序文でもいっているように、イタリアでの最近の伝記的研究の成果をとり入れつつ、その過小評価を——そして本文ではその過大評価をも——訂正し、適正な歴史的地位を与えようとするものである。つまり、この研究は三つの意図をもっているようにみえる。第一に新しい研究の紹介、第二に従来の研究の整理、第三に今までの評価の訂正。このようにみえてくるとすでに気がつくように、この書に欠けており、また本書の目標でもなかったものはブオナロッチェの思想と行動に対する、著者自身の研究であり、著者の見解の論証である。この点を除けば、この研究は上述の三つの意図を十分果しているといっていだらう。何よりも重要なことは、著者が指摘するようになり、もし人が彼の名を知るのには十八世紀の革命の最後のエピソードに関連してか、あるいは、バブーフやダルテとの関係を通じてであるとするれば、著者がブオナロッチェをブオナロッチェとして、つ

まり単なるバブーフの宣伝者でない局面、独自の革命家としての局面を再評価した点であるということが出来るのではあるまいか。それだけにまた、著者がバブーフの平等者陰謀に関する叙述を、十分研究されたものとして省略し(p. 80) ばかりでなく、バブーフの思想とブオナロッチェの思想の具体的交流をも省略してしまつたことは残念に思われる。より具体的にいへば著者はブオナロッチェを、バブーフと、共産主義者としてよりも、ロベスピエール主義者、一七九三年の憲法の終生変らぬ擁護者としてみているのであるが、それが具体的に資料にもとづいて論証されていないのである。バブーフ主義者としてのブオナロッチェよりもジャコビンジとしてのブオナロッチェを重くみるという見方には十分な理由があり、バブーフに対するブオナロッチェの個性を高く評価することにはもちろん評者も異議はないが、バブーフの思想とブオナロッチェの思想とをつきつけた上でその異同が具体的に、あるいは、資料的に考証された上でなければ、簡単に納得されうる問題ではないと思われる。

ロベスピエールとバブーフの対比はそれ自体、解決されるべき革命史上の問題点であり、マティエや、ルフェーブルの論争点でもあるのだが、(マティエはバブーフをロベスピエールの延長の上に見、ルフェーブルはそれらを全然別の社会的基盤の上に立つ二つのものとみている) それら二者の思想と行動の両方に交錯し、しかも、その両方の大義に対して終生忠実であったブオナロッチェにあっては問題は更に複雑となるであらう。

をバブーフ主義にみる見解を否定していることをつけ加えておこう。「彼の『財と労働の共同体』へのはつきりした支持、および彼のバブーフとの密接な同盟にもかかわらず、ブオナロッチェは自分を『バブーフ主義者』とは考えなかつたようだ。むしろ、彼はつねに自分を、そして同様に仲間をも、忠実なロベスピエールリストとみなしていた。」(p. 26)

「事件と彼の著書との間の時間のへだたりにもかわらず、『平等のための陰謀』は、革命的エピソードの歴史的評価と考えられてはならない。その著者の人柄と同様、むしろそれは十九世紀へのジャコビン精神の存続を示すものである……。それが表面上バブーフの陰謀に関して、バブーフ主義の『神話』の発展にたずさわつたどの人間にとつても、なくてはならないよりどころとして役立ったために、ヴァンドーム裁判(バブーフ事件に関する裁判……書評者)ではなくてテルミドル九日(ロベスピエールの没落……書評者)こそ、この著作の心理的、劇的クライマックスなのだという事実を見出す傾向がある。」(p. 80)

すでにのべたように、ブオナロッチェの本質をロベスピエール主義、またはジャコビン主義にみることに理由があるし、それほど珍しいことではない。

注 たとえば「ブオナロッチェのようなロベスピエール主義者」(豊田堯「バブーフとその時代、四〇七頁」)

またガロデイも「それ(ブオナロッチェの教義)はまた、ル

書評

著者はこの研究に一貫して、ブオナロッチェを二重生活者として捉えた。すなわち、一方において熱烈なジャコビン主義の擁護者、ロベスピエールの使徒、左翼共和主義者としての生活、他方に、バブーフ的な秘密結社と職業的革命家としての生活。だがその本質は前者にあるのだ。バブーフ的な秘密結社も、地下の革命的活動も、ルソーやロベスピエールが望んだ、徳の支配する社会を実現するための手段としてのみ意義を認められるのだ。「彼の社会の分析は、社会主義的伝統よりも『共和制』およびそれと手を結んだ『徳』の原理にもとづいているのだ」(p. 78)

「最後の目標は有徳の市民の共和国であった。その目標のためには『階級なき社会』が絶対不可欠であった。」「有徳の共和国よりも『財と労働の共同体』が彼の陰謀の最後の目的なのだ、とすることは車を馬の前にとりつけるようなものである。」(p. 131)

このように著者は、ロベスピエール主義者としてのブオナロッチェに重心をおきつつ、一応、この二つの思想に統一を与えている。だが、一方、ブオナロッチェがバブーフの『異体同心』であり(平井新「社会思想史研究」二七五頁・二七八頁)その著書「陰謀史」が、『平等党陰謀の正史』であり、『バブーフ思想の正典』(平井新、同書二九八頁)とすれば、ブオナロッチェの本質を共産主義者ではなく、ロベスピエール主義にみることにほなお問題が残されることとなる。

著者はかなりの自信をもって、くり返えしブオナロッチェの本質

ソ、ロベスピエールのあとをうけて、革命を、(エゴイズムと闘って平等を実現させる)という倫理的課題にすりかえよう」とした、とのべてはいるが、本質的には、これらの欠点にもかかわらずバブーフ主義の伝道者として認めている。(R. Garaudy: Les sources françaises du socialisme scientifique, 1949, 平田清明訳、二四三頁)

したがって、今後われわれの課題となるのは、ブオナロッチェがどの点までバブーフ主義者であり、またどの点においてバブーフ主義者からずれるか、その具体的『論証』ではなからうか。この著にはそれが欠ける。著者はブオナロッチェのジャコビンとしての性格を強く主張する余り、バブーフとの交渉を軽視した傾きがある、といえよう。すでにのべたように著者はバブーフの陰謀の経過をよく知られたこととして省略した。その点はうなずけるが、それと同時にバブーフとブオナロッチェとの、思想的交流をも、ともに省略したのはうなずけない。著者にとって、バブーフ主義者としての彼の側面は、彼の二重生活の影の部分であり、かつまた、実り少なかった秘密結社活動の部面としてしか考えられていないようである。著者が次のようにいう時、それは極言ともいえよう。「ブオナロッチェの『平等のための陰謀』に関する叙述が、誠実な記録者の叙述か、あるいは、無意識的な(あるいは計画的でさえある)伝説作家の叙述か、みきわめることはむづかしい。」(p. 44)

ブオナロッチェの秘密結社は、バブーフの時代のそれが一揆的

蜂起主義だったのに対し、より浸透主義的であり、宗教的神秘主義的であったことは認められているが、このブオナロッチェの秘密結社の現実的影響や、その存在自体の意味を低く評価することは、著者にとってブオナロッチェ自身が果たした歴史的役割を低く評価することにはならない。つまり彼の二重生活の影の部分でも低く評価することは、とりもなおさず、彼の陽向の部分が高く評価することなのだ。実際、ブオナロッチェが、一八三〇年代の共和主義運動・労働運動で果たした役割は、個人が果しうる役割としては絶大なものであった、と著者はいう。彼自身は直接参加してはいるが、あらゆる合法的・半合法的な共和主義運動組織のリーダーたちは、彼のもっとも密接な仲間たちだったのである。(pp. 98-101)

だが、彼が決定的な役割を果たした、というのは、彼が、十八世紀のジャコブンの伝統を、十九世紀の経済的条件の中から生まれた諸社会主義思想に結びつけた、という意味であって、バブーフ主義の伝統、という面からではないのである。著者のいう意味はさういう意味なのである。だから、ジャコバンに余り好意をもたないサン・シモンやフリーエと異って、その後にくる世代が、九三年の伝統に好意的であるのはブオナロッチェの影響なのだ、著者はそう述べている。(p. 126)

秘密結社の組織については、従来、それがイタリアのカリボネリII炭焼党の組織に由来している、という考えが支配的であったようであるが、著者は、最近のイタリアにおける Saitta や Lehning,

Francovich, などの研究に依拠しつつ、これに否定的な態度をとっている。そして、彼が一八〇九年頃作った秘密結社 *Sublime Maîtres Parfaits* は、ドイツのババリア地方に起った *Iluminaria* の影響、を強くうけたものであることを主張し、フリー・メーソンや、カルボナリとは独立に発展したと述べている。(pp. 40-42) そして一般に、ブオナロッチェの秘密結社の自立性を強調する立場に立っているようである。

十九世紀初期の秘密結社の現実的な影響力の評価は別として、その研究は、有名な共産党宣言の冒頭の二節、「一つの幽霊がヨーロッパを歩きまわっている——共産主義の幽霊が。」という言葉の歴史的な背景の一端をわれわれに思い浮ばしめるものがある。著者もそれを意識してか、しばしば「メッテルニヒにとりついた幽霊」(p. 46) 「メッテルニヒの悪夢」(p. 48) について語っているのは興味深い。さて、すでに本書の著者が、ブオナロッチェの本質をジャコバニストとしてみていることをくりかえしてのべておいたが、結論(p. 150 以下)における歴史的評価はこれを裏付けるであろう。

著者は二人のブオナロッチェ研究者を評しつつ、次のようにいっている。

Saitta はブランキをもつてブオナロッチェとマルクスとを結合媒介者としているが、Garihne はもっと精密に研究し、若きマルクスが屢々出席していたサークルと、ブオナロッチェが顔を出していたサークルとの交流を調べている。だがこの二つの結びつきにお

る証拠が乏しいことは、若きヘーゲル主義者と、年老いたルソーの徒との結びつきが稀薄でもあり、また間接的でもあることを示している。ブオナロッチェはマルクスが十九才の学生としてまだドイツにいた時死んだのである。ブオナロッチェは、二つのフランスの世代を結びつけたが、マルクスとバブーフを結びつけたのはなかったのである。反対に、「平等者陰謀」をめぐってブオナロッチェにまつわる伝説は、非オーストリア系なジャコバンであるバブーフを、ロベスピエールに結びつけるものである。マルクスとバブーフを、ロベスピエールから引き離れたがっているのに——と。(p. 154)

その当否は別として、まことに著者の考え方からして当然の結論であろう。

著者によると、ブオナロッチェの研究が復活したのは、一般的には、レーニンのロシアにおける成功によってである。歴史家は競ってレーニンの先駆者を発掘し、そして幾分誇張した、といっている。(p. 151) そしてイタリアにおいて特にブオナロッチェ研究が最近盛んになったのは、戦後の反ファシスト勢力によってであり、統一運動における、イタリア・ジャコバンの果たした役割を新に評価しようという動きからであるが、このような消極的な理由とともに、積極的に、多くのイタリア知識人の共産主義への忠誠 (Allegiance) さらには、ブオナロッチェを党の線をイタリア化するのに利用する、というような理由があげられている。この点著者は Onnis の意見を採用している。

終章の文献に関する評論はわれわれにとって大いに参考になる。

なお、本書はすでに飯田鼎氏によるすぐれた紹介があるが (本誌五十二巻十一号)、ここに再びとり上げた理由は、バブーフと共産主義の線上にブオナロッチェを位置づける多くの理解に対して、ロベスピエールとジャコバン、つまり政治的急進主義の線上にブオナロッチェを位置づけようとする著者の積極的な見解を再検討の対象にしたためであったことを最後につけ加えておこう。

E・ソロモン 共著
Z・G・ビルビヤ 共著

『大都市シカゴの経済分析』

Metropolitan Chicago, An Economic Analysis,
by Ezra Solomon and Zarko G. Bilbija, The Free
Press of Glencoe, Illinois 1959 (p. 208).

高橋潤一郎

(一)

最近、我国で地域経済政策の確立が各方面の関心を集めだし、地域経済に関する研究、経済活動に対する所謂リジョナル・アプローチの重要性が次第に認識される様になり、この様な要請に応えるべ